

あなたのプレゼンに
「まくら」はあるか？

落語に学ぶ仕事のヒント

立川志の春

立川志の春 → 三井物産
立川志の輔門下!

天職を掴んだ落語家がおくる
若手ビジネスマンのための
思考と発想を変える落語入門!

あなたのプレゼンに「まくら」はあるか？

落語に学ぶ仕事のヒント

立川志の春

星海社

55



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

はじめまして。落語家の立川志の春たてかわし はると申します。

私は落語家になる前、三年ほど三井物産という商社で、サラリーマンをやっていました。本書では、私が落語家になった後に学んだ事柄の中から、「これをサラリーマン時代知っておけばなあ……」と思ったことを、余すことなく語らせていただこうと思います。

たとえばその中の一つの切り口が「まくら」です。

まくらというのは落語家が落語の演目に入る前に語る導入部分です。我々はまくらを振ると言います。落語家はまくらの中で、自分が誰なのかという自己紹介をしながら、定番の小噺こばなしを入れてみたり、その時々の特事問題を取り上げたりしながら、スムーズに落語本編に入っていく準備をします。つまりはボクシングでいうとジャブ、食事でいうと前菜、歌謡曲でいうとイントロ、ベッドでいうと……もういいですね。いずれにせよ、本編をど

れだけ輝かせるかという点において、まくらがうまく機能するかどうか非常に大事になってきます。そしてこのまくらには、皆さんがプレゼンテーションをする際に大いに役に立つであろう技術がたくさん含まれています。

例えば私の場合、初めての場所で落語を演じる時には自分が落語家になった時の話をします。まずは自分のことを少し知ってもらって、その上で軽く落語についての説明をします。それまで全く落語に縁がなかったお客さんがいた場合、いきなり本編に入っても戸惑われるだろうと思うからです。ただ、ダイレクトに説明しても堅苦しくなるので、外国人の友達に説明する時の話をしたりします。

こんな具合です。

ようこそおいで下さいましてありがとうございます、立川志の春と申します。どうぞしばらくの間お付き合いのほど、よろしくお願い申し上げますが、もしかすると今日初めて落語を生でお聴きになる方もいらっしゃるかもしれません。難しいかと心配していらっしゃるかもしれませんが、全く心配することはありません。簡単です。本当に簡単です。実は私自身、今は落語家をやっておりますが、子供の頃から落語が好きだったというわけ

ではありません。それどころか、全くといっていいほど興味はありませんでした。

それがいつ変わったのかというと、会社勤めをしていた二十五歳の時、散歩中に偶然初めて落語と出会ったのがきっかけでした。こんなに面白いものを何故今まで知らなかったんだ！　と思ひ、落語に惚れこみ、それから一年後に会社を辞めて今の師匠の元に入門しました。

会社の上司に「辞めさせて下さい」と伝える時はドキドキしました。会社の歴史上、「落語家になりたいんです！」と言って辞めた人間はおりませんでしたし、二十代で辞めるのは嫌がられますから、上司から反対されるのは当然予想出来ました。それでも、たとえ何を言われたとしても自分の気持ちを伝えて上司を説得するんだと、頭の中で何度も何度もシミュレーションを重ね、話し合いに臨みました。

すると意外と阿吽あうんの呼吸で話は進みました。私が「辞めさせて頂きたい」、上司が「辞めて頂きたい」ということで、両者の利害が一致しましてね。非常に平和な話し合いでした。そういう時は、「もう一度じっくり考えてみる」と言っ、一旦辞表を返してもらえらるものかなと思っていました。本当に辞めてもらいたい場合は返さないのですね。すんなりと受け取ってもらえました。本当に素敵な会社でした。誰一人として私を止めた人はいな

い、全員笑顔で私を送り出してくれた、本当に素敵な会社でした。

でも人生というのは分からないものですね。私が辞表を提出してから実際に辞めるまでの間に会社が少し不祥事をやらかしまして、世間から叩かれるようなことになりました。そのうちに会長と社長が責任を取らなくてはいけない、という事態に発展しましてね。結果、会長、社長、そして私が、同日に辞めるということになりました。

引責退任です。会社の経営の責任を取るような形で、私は落語界に入ってきたわけです。

でも良かったと思っています。落語というのは日本独自のものですからね。世界に類のない芸なんです。それは素晴らしいことなんです、ただ一つ問題は外国の友人に今何をやっているか説明するのは難しいですね。落語をやっているといっても彼らは Rakugo という言葉自体が何だかわからないわけです。海外にはスタンダップコメディというのがあって、それと似ているところはありますけれども同じというわけでもない。ですから Rakugo とはなんだ？ と聞かれますと、とりあえず日本の伝統的なものだから、ジャパニーズ・トラディショナル・スタンダップコメディ・バット・シットダウンというよなことを言うわけです。するとともっと混乱してしまふ。スタンダップ？ シットダウ

ン？ とつちなんだ！ ということになるんですね。着物を着て座布団というクツシヨンの上に座って扇子と手拭いだけを持って話をするんだ。で、この扇子が箆になったり刀になつたりするんだ。というとおーマジック！」って。「いや本当になるんトヤない！ そういう風に頭の中で想像してもらうんだ。同じように左を向いて右を向くと全く違う人間になるんだ」「つまり左翼と右翼みたいなものか」「全然違う！」とまあ訳がわからなくなつたりしますけども、一応興味を持つてもらえるのは嬉しいことです。

というようなことを話しながら、段々と本編に入っていくわけです。ただしやべつているようですが、このような場合のまくらには重要な役割があらまして、

- ・ どういうお客さんなのか、しゃべりながらリサーチをしている
- ・ 徐々に落語、そして私自身に対して親近感を持ってもらって本編を聴く態勢に入ってもらおう

ということですよ。お客さんの反応から、落語を聴いたことがあるのかどうか、私のこと

を知っているのかどうか、笑うということに慣れているのかどうか、会社勤めをしている人はどのくらいいるのか、ベタな笑いが好きなのか少し捻ひねった笑いが好きなのか、そういうことを感じながら本編に入っていくわけです。このあたりはプレゼンにも応用出来る技法ではないかと思えます。

他にも落語にはビジネスの為になる要素がいくつもあります。そこらへんをこれからゆつくりお話ししていきたいと思えます。

そもそもなぜ、サラリーマンだった私が落語家になったのか、今のまくらかかぶる部分はありませんが、少し詳しく説明させて頂きます。

私は、アメリカのイェール大学を卒業し、帰国して三井物産に入社しました。社会人になって二年が経った頃、東京は巢鴨すかもの町を散策中に、とある落語会に迷い込みます。そこで生まれて初めて落語と出会い、体の震えが止まらないような衝撃を受けました。「こんな面白いものが日本にあったのか!」と。会社勤めをする前の四年間をアメリカで過ごした私は、日本に対する自分の無知さ加減を痛感するとともに、この未体験の芸能との出会いに感謝していました。

「これだ！俺の求めていたものは！」。それから一年の間ありとあらゆる場所でありとあらゆる演者の落語を見倒し、落語家になるという決断をしました。入門した先は、一年前に巢鴨の町で私を魅了し、私の人生を変えてしまった師匠、立川志の輔すけの門下でした。

見習い時代、サラリーマン経験や、留学経験はクソの役にも立たないばかりか、邪魔だとさえ思っていました。周囲からは常に、そのような経歴などこの世界では通用しない、そもそも会社で使い物にならなかつたからこっちに流れてきたのだろうと言われ続けました。そんなことはない！と反射的に思ってはみるものの、よくよく考えてみたら、彼らの言っていることは概ね間違ってはいませんでした。当時は悔しくて認められませんでしたが、今なら胸を張って言えます。「確かに私は、会社でも使い物になっていていませんでした！」と。

私が前座修業中に出会ったスーパー前座の先輩たちは、サラリーマンとしても有能だっただろうなと思える人たちでした。同じように、サラリーマンとして会社で実績を残していた人たちは、落語の世界でも十分通用するのだろうなと思える人たちでした。何が言いたいのかというと、サラリーマンだから、芸人だから、ということは関係なく、基本的にはどこでもはできるのだということです。逆に言うと、できない人はどこでもはでき

ない。どっちもデキなかつた私が言うのだから間違いありません。

でも、ちょっととした気付きが自分の中に大きな変化をもたらすということはありません。私にとって、修業の中で得た気付きは、まずは自分がデキないのだということを知ること、認識するために必要なものでした。デキないという認識があれば、何か手立てを打つことも可能になります。ウケるためにはスベつたことを認識出来なければならぬのと同じことです。スベつたことを認識できていないためにつまらない話を鉄板ネタのように繰り返す上司、よくいませんか？

そんな上司を持った部下の皆さん、そしてそんな上司の皆さんに落語をお勧めします。この本で取り上げた落語という切り口が、何か一つでも、読んで下さった皆さんのヒントになればいいなと思っています。私自身、もっと早く落語と出会っていれば、もう少しマシなサラリーマンになれていただろうなと思うこともあります。でもそうであれば確実に落語家にはなっていなかったでしょうから、やはりベストなタイミングだったのです。

本書は、一応はビジネス書のジャンルに入る書籍だと思えます。しかし、語るのはビジネスのことだけではありません。私自身、落語を通して多くのことを学び、まだまだ未熟

な身ながら少しずつ成長してきた実感があります。師匠に出会って落語の魅力にハマリ、そして今もなおその奥深さに魅了され続けています。そうした体験を味わってもらうためには、本書を読むだけでは不十分です。本書を読み、実際に落語をビジネスの、人生のパートナーとして選んでももらいたい。落語に寄り添って人生を歩むということがどういうことなのかを知ってもらいたい。そのために、まずは「落語って、なんだか面白そうだな」と思ってもらえるよう工夫して本書を書きました。

そんなところで、まくらはこのへんで切り上げるとして、さっそく本編に入りましょう。落語家の書く本ですから、どうぞお気軽にのんびりとした心こころもち持で一席の間、もとい一冊の間、お付き合い頂ければと存じます。

目次

はじめに 3

一章

イエール、三井物産、立山流

17

アメリカで感じた自己主張の大切さ

18

偏差値で大学を決めたくない！

21

7勝8敗の、イエール生活

27

立川志の輔との出会い

31

オックスフォード帰りの弟は、劇団四季へ

35

本部長は「小島、お前落語家になるんか!？」と叫んだ

37



落語に仕事を学ぶ

最初の修業は「自分をなくす」こと

師匠と徹底的に同化する

師匠は「実力」で選ぶ

落語はなぜ、何度同じ噺を聞いてもおもしろいのか

落語は世界でも珍しいスタイル

弱さを受け入れる日本の価値観

これだけ知っておけばOK！ 落語用語入門

ご隠居？ 与太郎？ 落語の登場人物

英語で落語をして気づいたこと

ビジネスに効く落語ネタ



まくららに学ぶ雑談

- 落語家は「まくら」をやりながらネタを決める
92
- ウケないことも、前座の仕事
99
- 新人に変化球を覚えさせてはいけない
105
- 新人をのびのびと育てる、落語界の仕組み
107
- 場をセッティングする「まくら」の役割
111
- 雑談でウケる、落語のテクニク
113
- いじりネタには細心の注意を
118
- 談志師匠と交わした言葉
122
- 震災で延期した二つ目の昇進記念
124



四章

リズム、間、調子を獲得せよ！

なにはなくとも、「リズム、間、調子」

まずは自分の声を録音してみる

名人に技術を学べ

会話のフレームとして使える、ネタの型

技術としてのユーモア

喋りに没頭し過ぎても駄目

129

五章

最強の趣味、落語への誘い

落語を聴きに行ってみよう！

165

166

162

158

143

141

139

130



落語家を、好きなのところに呼ぶ

自分で落語をやってみる

おわりに

172

171 170

--	--	--	--

任一儿三井物産。

立
山
築

一章

アメリカで感じた自己主張の大切さ

まずは私自身のことから語らせていただきたいと思います。私がどのようなキャリアを経て落語家になったのかということは、この本を通して語る「ビジネスに効く落語」というテーマに深く関わる部分でもあります。少々長くなってしまうですが、しばらくの間、お付き合いいただけると幸いです。

私、立川志の春（本名：小島一哲^{こじまいつつ}）は、大阪府豊中市で生まれました。長男として育ち、2つ下の弟が一人います。父親は住友生命でアクチュアリー（将来のリスクから保険の支払額や掛金率を算出する専門職という変わった職業です）として働くサラリーマン。私は地元の公立小学校に通っていましたが、小学2年生のとき、父の仕事の関係でニューヨークに引っ越すことになりました。

生まれてはじめての海外生活がスタートしました。といっても父の転勤は1年間という短期の予定です。どうせ1年後には元の生活に戻るのだから無理に現地の学校に入学せず、日本人学校に通うという選択もありました。しかし、両親は私を現地校に入れることを選んだのです。「どうせ1年だけだから日本人学校に行かせよう」と思うのか、「どうせ1年だけだから現地の学校に放り込もう」と思うのかの間には大きな違いがあります。この

時、両親が下した決断により、私の後の人生は大きく変化しました。当時は苦勞もありましたが、両親が現地校に通わせてくれたことに、今ではとても感謝しています。

といつても、慣れない土地で右も左もわからない状態です。渡米前に少しでも英語を習っていたものの、「My name is..」くらいしか喋れない、低い語学力でした。しかし、担任の先生がとても優しい人で、私が学校に馴染めるようにあれこれ世話を焼いてくれました。そのおかげで半年後にはすっかり現地での生活にも慣れ、父の転勤が3年に長引くことが決まった際も「まだアメリカにいられるんだ。ラッキー!」と思ったほどでした。つくづく子どもの順応能力はたいしたものだなと思います。

もちろん、楽しいことはありません。異国の地ですから文化の違いに戸惑うこともたくさんありました。アメリカでの生活で感じたことは、個人より全体の輪を重んじる日本とは異なり、とにかく自己主張することを大切にする文化が根付いているということです。私があることに気がついたのは渡米直後に起こった、ある事件がきっかけでした。

ある日、普段から世話を焼いてくれた先生が休み、代わりの先生が学校に来ることになりました。見慣れない先生を前に、少しだけ緊張していたことを覚えています。そして、その日に、事件が起こりました。クラスメイトの男子の青い手袋が片方なくなつたと

いうのです。そこで真つ先に疑われたのが私でした。同じような色の手袋をしていましたし、英語が十分に話せず、考えもわからないから、とにかく怪しいと思われたのでしよう。もともと内気な性格だったこともあり、私は反論もせずにとただただ泣いているだけでした。

結局、その手袋が後になってひよっこり出てきたことで、事件は解決しました。あまりにあっけない結末に、拍子抜けしたものです。当然私としては、「おいおい、ちょっと待ってくれよ。疑われたこつちの立場はどうなるんだ！」としこりが残りました。

いま考えれば、この「青い手袋事件」をきっかけに、私の性格は大きく変わったような気がします。それまでは体は大きく、スポーツは得意だったものの、性格は内気で弱虫。しかし、事件以来は人前で泣くことを止め、英語もしっかり勉強し、言いたいことがあればハッキリと言う性格になりました。自分の主張をきちんと伝えなければ相手に私がどういふ人間であるかがわかってもらえないし、自分を守ることはできません。さまざまに民族が暮らすアメリカでは、泣いて黙っているだけでは相手に想いを伝えることができないのです。手袋を取った犯人ではないのに疑われたという、あのときの悔しい出来事により、自己主張の大切さを身^{もっ}を以て実感したのでした。

事実、アメリカでは幼い頃から自己主張の力を鍛えられます。たとえば小学校のときに

は、自由研究を丸暗記して紙を見ずに5分間スピーチするという授業がありました。スピーチを終えた後は他生徒からの質問タイムです。気を抜いていると、針のむしろという感じになります。5分間のスピーチをし、クラスメイトからの質問に答えることは、当時の私にとって大変なことでした。

自己主張の大切さに重きを置くアメリカ式の教育を受けたことは、私の人格形成に大きな影響を与えました。自分の考えを相手に伝えたり、反論して議論したりなど、いわゆるディベートの力は付いたと思います。

しかし、そのことが師匠・立川志の輔門下に入った後になってとんでもない厄介やっかいの種になるのですが、それについては次章で詳しくお話させていただきますと思います。

偏差値で大学を決めたくない！

日本に帰国したのは小学6年生の6月頃でした。

父の仕事の都合で大阪には戻らず、千葉県の中川市に転居し、地元の公立小学校に通うことになりました。その頃、「帰国子女はいじめられる」というニュースがアメリカで流れていたため日本の学校に通うのは多少の怖さもありましたが、当時の中川はまだ田舎いなかっぼ

さが残ったのどかな街。心配したような殺伐きつぱつとした雰囲気はありませんでした。映画に出てくるような、昭和の街といった風情ふうせいです。

私が転校した学校には、ガキ大将がいました。転校して間もないある日、私はそのガキ大将に呼び出されます。指定された場所に行くとガキ大将が子分を引き連れてやってきて、「かけっこで勝負しよう」と言い出しました。しかし、ゲームと同じですぐにはボスと戦うことはできません。ガキ大将は「俺が出るまでもないから、お前らがいけ!」と子分たちに指示を出します。子分の足が早い子ベスト5と、順々に勝負することになりました。

私は見かけによらず運動には自信がありましたので子分たちはなんなく撃破していきました。すると、ついに重い腰を上げたガキ大将が、「しょうがねえな。俺が相手してやろう」と満を持して出てきます。結果は……、私はガキ大将に僅差で負けてしまいました。子分とさんざん戦ったあとでくたくたになった状態での勝負ですから、当たり前と言えば、当たり前です。もともと、そのガキ大将は運動神経抜群で、体も私より大きかったので、万全の状態で勝負しても負けていたでしょう。

しかし、怪我の功名とでも言うのでしょうか、どうやら「僅差で負けた」という結果がガキ大将から気に入られたらしく、その一件があつて以来、「あいつはなかなかの奴だ」と

認めてもらうことができました。小学6年生という中途半端な時期に引越してきたこともあり、それまでは「海外から来た客人」といった感じだったものの、かけっこで勝負してからはなんとか小学校に馴染むことができたのです。「俺に勝てるほどではないけど、俺と張れるくらい足が速い」というのがガキ大将にとってツボだったのかもしれない。

一方、中学校に入る際も、「帰国子女はいじめられる」という噂が相変わらず気になっていました。しかも、地元の公立中学校はどちらかというところと荒れた学校。同じマンションに住んでいる先輩から、「目を付けられないように気を付けろよ」とアドバイスされたこともあり、そんなこともあり、私立を視野に入れて進学先を探すことになりました。そんな折りに、母親が帰国子女を受け入れている渋谷教育学園幕張中学校（以下、しぶまく）を見つけてきてくれたのです。当時できたばかりの新設校で、私は4期生になります。

渋幕は中高一貫制の学校で、今はかなりの進学校となっているようです。今の渋幕には、まず間違いなく入れないでしょう。全く運のいい人生だなと思います。学習のカリキュラムが大変充実していて、帰国子女のコースではアメリカ人の先生がアメリカの教科書を使って教える授業もありました。帰国子女のなかには日本に帰ってきてから英語を忘れてしまう人も多いと聞きますが、私の場合はむしろ、授業のおかげでアメリカにいたときより

も英語が上達していました。

アメリカの大学に進学することを初めて意識し出したのは高校2年生の頃でしょうか。その頃になると皆が模擬試験の結果を受け、「偏差値〇〇だから、△△大学の政経は難しいけど、商学部なら受かるかな」「私の偏差値なら××大学くらいかしら」「俺は□□大学くらいかな」などと皮算用かわざんようを始めます。私はこういった友人たちの姿勢に強烈な違和感を覚えていました。「大学は学びたいことがあるから行く場所であり、偏差値と照らし合わせて決める場所ではない」と思っていたからです。そんなに大した偏差値でもなかったくせに。しかし、そんなご立派な信念を抱いていたその一方で、自分自身もなにがしたいかが決まっているわけではありませんでした。そんな風にあれこれ悩んでいる時期に先生に勧められたのが、アメリカの大学への留学でした。

アメリカの大学なら1、2年生の頃は教養課程を学び、3年生から自分の専門を決めればいいと聞き、留学に興味を持ち始めました。「今はまだやりたいことがなんだかわからないけど、3年生になる頃には決まっているだろう」と思ったのです。また、皆が「東大だ」「早稲田だ」と言っているなか、「1人だけ留学を目標にしている俺、カッコよくない？」という思いもあり、私はそれ以来、周囲に「ハーバード大学に行く」と宣言するようにな

りました。今考えればこれはこれで、偏差値で学校を決める以上に、短絡的な発想だったなと思うのですが……。

ともあれ、さっそくアメリカの大学に入るための準備に取りかかります。とは言っても大学受験の予備校に行くわけではなく、学校の授業で英語を勉強したほかは、「国際人養成道場」というアニメに出てくるような名前の私塾に通っていただけでした。熱血オジサン先生が主宰しているちょっと変わった塾で、英語のほかにも人生に対する考え方などを学びました。国際人養成道場……、何度声に出してみても、すごい名前だなと思います。アメリカの大学受験は日本とは違い、高校での成績や小論文、面接などの結果が重視されます。ですから、基本的には学校の成績を落とさないことに力を注ぎました。

今はどうだかわかりませんが、当時は日本からアメリカの大学を受ける際に、日本国内にいるその大学の出身者に面接を受けに行くというシステムがありました。ハーバード大学の場合は、キリスト国際基督教大学（ICU）の教授に面接をしてもらうことになっていました。しかし、そこでは思うように力が発揮できませんでした。面接のあとに教授のゼミ生などが参加するパーティーに出席させてもらったのですが、そこでも積極的になれず隅っこで縮こまっている始末。海外生活のなかでだいぶ改善されたと思っていた内気な性格が、よ

りによってそのときに出てしまったのです。結局、あまりいい印象を与えられなかったでしょう。ハーバード大学にはあっけなく落ちてしまいました。

しかし、そこでめげるわけにはいきません。その後も受験を続け、結果は5勝2敗の2補欠。そのうち、最後に通知がきたのがハーバード大学に次ぐ第2志望のイエール大学でした。受験した感触から「どうせ受からないだろう」とあまり手応えを感じていなかった大学だったので、合格通知を手にした時は嬉しかったですね。他の大学にも心が揺らいでいましたが、「やっぱリエール大学に進学しよう」と直感的に思ったのを覚えています。

ちなみに、親は私の留学にはどちらかというと反対の立場でした。日本の大学を出たほうが就職に有利だと考えていたからです。今でこそ留学も外資系への就職も当たり前の世の中になってきていますが、当時の親の価値観ではやはり日本の大学を出て日本の一流企業に就職することが、わかりやすい王道の成功パターンだったのです。

しかし、そんな両親もイエール大学の名前は知っていたらしく、「まあ、名前が知れている大学だし、進学させてもいいか」と最終的には留学することを了承してくれました。

7 勝8敗の、イエール生活

イエール大学の学生数は1学年1300人ほどでしょうか。日本のマンモス大学と比べると、ずいぶん小さな規模の大学でした。しかし、ジェラルド・R・フォード、ビル・クリントン、ジョージ・W・ブッシュなど、アメリカの大統領を数多く輩出している「名門」と呼ばれる大学です。金融や経済といった実学を重んじるハーバード大学とは対照的に、法学や政治学に力を入れていることが特徴としてあげられます。

私はそんなイエール大学に血気盛んけつきさかというか、一旗あげてやるぞくらいの思いで乗り込みました。一度、アメリカで生活していたということもありましたし、日本で過ごした高校までの生活で成長した自負もありました。「小学校までの私じゃない！ アメリカ人よ、どうだこれが日本の詰め込み教育だ！」くらいの気持ちで、気負いながら学生生活をスタートさせたように記憶しています。

しかし、その勢いは入学早々、見事に挫くじかれてしまうことになります。

というのも、周囲の学生たちは日常会話からして、ちょっと考えられないくらいレベルが高かったのです。成績が優秀なのは当たり前前で、「高校時代は地域の恵まれない子どもたちのために開発した教育プログラムを実践してきた」とか、「パソコンのプログラムを独自

開発中で音楽の才能もピカイチ」とか、「5カ国語がペラペラで、スポーツでも全米3位」とか、「100mを10秒台で走れる」とか。勉強だけではなく、複数分野にわたって際立った才能を持つ学生が多くいました。いかにもガリ勉！といった学生は、ほとんどいません。

また、アメリカの優秀な学生は自分の考えをしっかりと持っていて、教授に対しても意見を対等に言うことができます。一方、私はというと歴史的事件が起きた年号はたくさん覚えていても、皆が話している「ヨーロッパにおける移民政策の功罪」のような深い議論はできません。知識量はあっても、それを生かす思考量と表現力がなければ意味がないのです。アメリカの大学のレベルの高さに打ちひしがれるばかりの毎日でした。

さらに、大学の授業で使われているようなきちんとした英語は私にも理解できるので、独特の言い回しが含まれた日常会話に接すると、とたんになにをいつているのかわからなくなるという経験が度々ありました。特にジョークには全くついていけず、みんながなんで笑っているのかわからないということもしばしば。そんなこともあり、当初あった自信がどんどん挫かれていきました。

挫折はまだまだ続きます。体を鍛えようとラクビー部に入ったまではよかったものの、

1回目の練習試合でいきなりねんざし、松葉杖をついて大学に通わなければならなくなっ
てしまったのです。我ながらなんとも情けない……。もちろん、4年間を通して楽しいこ
ともたくさんありましたが、入学当初の挫折感は今も鮮明に覚えています。

最終的にイエール大学とは、引き分けくらいのところまで持ち込めたといった感じでし
ょうか。相撲でいうと7勝8敗。負け越しはしたけれど周りについていこうと必死に努力
して、なんとか五分より少し分が悪いくらいまで盛り返すことができたと思っています。

アメリカでの大学生活を通して実感したのは、「自分の核となるものはなにか?」という
ことを確立しなければいけないということです。当たり前ですが、私は日本人としてイエ
ール大学に入学していたため、自分が日本人だというアイデンティティは常に持つていま
したし、周囲もそういう目で見ていました。しかし、「日本に生まれた」という事実以外
に、私はいったいなにを持っているのでしょうか。アメリカの友人は、アメリカこそが世
界No.1だ」という強い自負を持っている人ばかりでした。他国からの留学生も、「自分の国
の文化はすごい」と胸を張って主張し、「こんな文化がある」と自信満々に紹介してきま
す。しかし、私は友人に日本文化のことを聞かれても上手く答えられないことがほとんど
でした。

それどころか私より日本のことに詳しいアメリカ人の友人もいたくらいです。友人から「すごい映画監督がいるんだ！」と黒澤明監督の映画を薦められ、視聴覚室で一緒に観て感動したこともありました。「さすがは世界のクロサワ。アメリカにもファンがいる」と言ったところですが、普通は逆ですよ。本来ならば私が黒澤映画の素晴らしさをアメリカ人に向けてプレゼンテーションしなければいけないところです。日本にいたときから英語の学習をしていたのでアメリカの映画はたくさん観ていたのですが、日本映画のことについてはほとんど知識がなかったのです。

英語に関しても、はじめはアメリカ人と同じように話そうと、一生懸命、ネイティブの発音を真似していました。しかし、やっぱりどうしても日本語の訛りなまは最後まで消せないのです。一方、他の外国からきた留学生に目を向けてみると、堂々と自国訛りの英語で喋りまくっています。会話を聴いていけば、「あの人はインドの人かな?」「あの人はフランスの人かな?」とすぐにわかります。訛っていることをまったく気にしていません。物怖じせずに、ドギツイ訛りのままでネイティブスピーカーと渡り合っています。

アメリカ人としてもそちらのほうがリスpekト出来るらしく、下手に訛りを矯正しようとするのは逆効果だということがわかりました。考えてみれば当たり前のことです。無理

にネイティブの発音に合わせようとするのは、関西人の前で下手くそな関西弁で話すようなものですから馬鹿にされるに決まっています。それに気がついてから、発音を気にせず英語で会話ができるようになり、だいぶ楽に生活できるようになりました。

4年間のアメリカ留学を経て、私は逆に「日本」というものを強く意識するようになりました。ですから、就職先も日本の企業に的をしぼり、日本に帰国して就職活動の面接を受ける日々をスタートさせます。そして、決まった企業が三井物産でした。

これには私の両親も喜びました。両親はどちらかというと保守的で、私に安定した人生を歩んでほしいと思っていましたから、日本の大企業である三井物産に就職することには大賛成でした。特に母は「あなたもようやくわかってきたようね」といった感じで、アメリカ帰りの長男が世間で言うところの「王道のキャリアコース」に戻ってきたことを喜んでいました。

まさかその数年後、「落語家になりたい」なんて言い出すとは知らずに……。

立川志の輔との出会い

入社後に配属されたのは、社内でも一、二を争う高収益部署の鉄鉱石部でした。私は英

語が話せるということもあって、オーストラリアの担当となり、現地との連絡などを行っていました。一度だけですが、実際に鉄鉱山まで研修にいったこともありました。いろいろと大変なこともありましたが、それなりに楽しい社会人生活を送っていました。

ところが仕事に慣れるか慣れないかの入社3年目に、後に入門することになる師匠の落語と出会ってしまったのです。2001年のことでした。会社の休日に当時、付き合っていた彼女（現在の妻です）の住む巣鴨の街を歩き、評判だった餃子屋に向かっている途中に師匠の独演会の看板が立っているのを見つけたのです。

師匠は当時から『ためしてガッテン』などのテレビ番組に出演していたので、落語素人の私も顔と名前だけは知っていました。しかし、落語に興味を持ったことのない私は、テレビで落語が流れていてもチャンネルを変えていました。ご飯を食べておらず、とにかくお腹が減っていたのでさっさと餃子を食べに行きたかったのですが、多少は落語に関する知識があった彼女から「なかなか観られない落語家さんなんだよ。観に行ってみようよ。面白いかもしれないよ」と強引に誘われ、なかばしぶしぶ当日券を購入することにしました。

現在ならば考えられませんが、幸運なことに当時は、師匠の独演会の当日券が取れる場

合もあつたんですね。

そして、なんとなく入った師匠の独演会を聴いて、人生最大の衝撃を受けます。『はんとたおる』という演目がはじまった瞬間に会場中が大爆笑。ダイエットをしているのにもかかわらずサービス品のハンドタオルほしさにシュークリームを大量に買った妻と、それに対して疑問を投げかける夫との掛け合いがおかしくておかしくて、私も「落語ってこんなに面白いのか」とゲラゲラ笑って聴いていました。『はんとたおる』は、言葉も舞台も現代の新作落語だったため、「これはたまたま、素人にも分かりやすいものが観れたのかな？」と思っていました。ところがどっこい、続く『井戸の茶碗』という古典落語でも、笑いあり、涙ありの大盛り上がり。終わった頃にはすっかり師匠の大ファンになっていました。

以来、師匠の公演に必ず足を運ぶのはもちろんのこと、さまざまな落語家の高座こうざを月20回くらいのペースで観に行くほどに落語にハマっていきます。自分が誘ったことがきっかけだったとはいえ、彼女も私のハマりようには驚いているようでした。

どの段階で落語家になりたいと思うようになったのかは自分でもさだかではありませんが、きっと師匠の落語を初めて聴いたときから、心のどこかにはそういう気持ちがあったのだと思います。会社に不満はなかったものの、「ビジネス以外に、何か自分にじっくりく

るものがあるんじゃないか」とモヤモヤした気持ちを抱えている時期でもありました。

師匠の落語を聴いた瞬間、アメリカ留学中に自問自答した「自分の核となるものはないか?」という問いの答えが見つかったような気がしました。落語は日本の伝統的な芸能ですし、心底面白いと外国人相手にも紹介することができます。海外に行っても胸を張って自分が日本人であるということを誇れる魅力が、落語には備わっているように思えたのです。

それと、初めて独演会を観た時に出て来た今の兄弟子も素人出身だったということを知り、自分にも同じくらい出来るんじゃないかという思いがありました。勿論入門後すぐに、大きな間違いだということに気付くのですが……。兄弟子の背中は芸という意味でも氣遣いという意味でもはるか彼方にありましたから、とんでもない勘違いでした。でもその勘違いが人生を変えるきっかけを生んでくれたのです。兄弟子には大変感謝しています。

しかし、さすがに会社を辞めるのには慎重になりました。私はそれまで何ごとにも深くハマらない性格だったので、少なくとも半年間はどうか見てみようと思っただけです。半年後に同じように、いや今以上に落語にハマっているのか、それとももう飽きてしまっているのか見極めてからでも落語家を目指すかどうか決めるのは遅くないと思いました。

そして半年が過ぎ、私が選んだ道は……やはり会社を辞めて落語界に入ることでした。落語家になりたいと切り出した時、彼女はたいして驚きはありませんでした。彼女は同じ会社に勤める2つ上の先輩。私が落語にハマった時から、こういう日がくることがわかっていたようでした。「やってみればいいんじゃない」と言ってくれましたが、おそらく止めても無駄なことがわかっていたのでしよう。そうなれば次に説得するのは両親になります。

しかし、すでに紹介した通り、我が家はどちらかというところ保守的な家庭です。父は浜松の繊維商の倅、せんいしやう、せがれ、専業主婦の母も国鉄マンの娘として育ったため、落語家になるなどということは理解の範疇をはんちゆう超えています。ましてタイミング悪く、我が家にある事件が起こった直後でしたから……。

オックスフォード帰りの弟は、劇団四季へ

その事件の主人公は、これまであまり出てこなかった弟です。2つ下の弟は私と同じ渋幕中学校に入学しました。私が通ってみて、いい学校だったので、弟も同じ学校に入ることになったのです。帰国子女枠に入るには帰国から2年以内という規定があったため、弟

は一般生徒の枠で入学しました。しかし、高校は途中からイギリスに留学。そのまま現地の大学に進学することを目指します。文系だった私と違って数学が得意でした。保険会社のアクチュアリーをしていた父の脳味噌は、すべて弟に遺伝したようです。足の速さと太りやすい体質は、母から私へと受け継がれました。

同時に、弟は大の音楽好きでした。高校時代から作曲をするようになり、たまたまでしょうが賞を獲得したこともありました。大学もアメリカの音大を受験して見事に合格。そのまま音大に進学したかったようですが、例によって親が猛反対しました。小学生の子供を現地校に放り込むなど、元来「よそはよそ、うちはうち」という考えの両親でしたが、同時に強い安定志向も持っており、「音大なんて就職のつぶしがきかない大学は駄目だ」というのです。最終的に弟が入学したのはオックスフォード大学の数学科でした。しかし、弟は入学に際して、「両親にある条件を付けます。それは、「3年間で卒業できたら後の1年間は自由にさせろ」ということ。オックスフォードでは頑張れば3年で卒業できる制度があつて、弟はそれに挑戦し、後の1年間は音大で学ぼうと計画したのです。

厳しい道のりだったとは思いますが、音楽への情熱が弟を駆り立てたのでしよう。当初の計画通りにやっつてのけます。オックスフォードを卒業後はイギリスの音大に1年通い、

青春を謳歌おっかしていたそうです。そして、日本に帰ってきて驚愕のカミングアウトを
しました。

それは「劇団四季に入ることにしたから」というもの。驚いたのは両親です。オックス
フォード大学を出た次男が劇団に入るなんて……。もちろん、劇団四季は日本でトップク
ラスの劇団ですが、両親からしてみれば不安定な職業に映ったのでしょう。私は母から「あ
んたからも言って」と頼まれたのですが、「入ろうと思ってもなかなか入れないんだからい
いんじゃないの?」というようなことを言っただけでぐらかしたことを覚えています。最終的
に両親も「長男が三井物産という手堅い会社に勤めているから、次男は好きにやらせれば
いいか」と諦めたようです。

しかし、その裁定が下った直後、私は師匠の落語と出会ってしまうのです。

本部長は「小島、お前落語家になるんか!？」と叫んだ

私がなぜ、反対するに決まっている両親の了解をわざわざ取ろうと思ったのかという
と、立川流には、親が反対していたら入門できないというルールがあったからです。案の
定、親の説得には時間が掛かりました。親の希望どおり大企業に入り、将来は安泰だと思

ついていた長男が突然、一度もやったことがない、しかも最近ハマったばかりの落語に挑戦したいというのだから両親の動揺は相当なものでした。弟の一件があったばかりの両親としては、「二哲、お前もか……」という絶望的な心境だったと思います。

しかも弟の場合は昔から音楽をやっていたため、まだ劇団四季に入団するという選択は理解できます。一方、私は高校の文化祭で漫才をやったり、「言いたいことがあるやつがやるべきだ!」とわけのわからない理屈をこね、主席の同級生を押しつけて卒業式で答辞を読んだりと、出たがりな部分は多少あったものの、芸能の世界とは程遠い生活を送っていました。ですから両親としては唐突におかしなことを言い出したという印象が強かったのだと思います。「なんでやったこともないのにできるっていうんだ?」という気持ちもわかります。猛反対するのは当然です。

しかし、だからといって諦めるわけにはいきません。この時にはすでに「自分の人生を賭けられるのは落語しかない」と思っていました。粘り強く説得を続けた結果、ようやく了解をえられたのは3か月後のことでした。納得したというよりは、「なにを言っても聞かないから仕方ない」といった感じでした。「劇団四季にもオッケーを出したんだから、一哲にだけ断固として反対を貫くわけにもいかない」という気持ちもあったのだと思います。

最終的には、父から「もう大人なんだから自己責任でやれ」と言われました。小泉純一郎さんが首相を務めていた時期なので、流行っていたんですね。「自己責任」という言葉が。

ともあれ、ようやく親の了解を得られた私は、さっそく師匠に手紙を書きました。手紙には、「師匠の落語を初めて観て、とにかく感動しました。衝撃を受けました。今はサラリーマンをしています。落語家になりたいと思っています。その際には師匠に弟子入りしたいと思っています」というような言葉を連ねました。すると師匠の事務所から、「師匠が会ってあげると言っているから、履歴書を持ってNHKのスタジオまで来てください」と連絡がきました。面接に履歴書が必要なのは、どの世界も同じようです。

ともかく、すぐに履歴書を書いてNHKに向かった私は師匠に初めて対面し、弟子入りを懇願しました。そんな私に対して師匠は、「気持ちにはわかった。でも三井物産なんか、なかなか入れる会社じゃないんだから、辞めることはない」と言いました。「アマチュアとして落語を演じている人はたくさんいる。そっちでいいじゃないか」と。

師匠から説得される形でその日は帰ったのですが、私は心底反省していました。「サラリーマンをしながら弟子入りを懇願したって、本気だと思ってくれるはずがない。会社を辞めてもう一度出直そう」と心に誓ったのです。海のものとも山のものとも知れぬド素人の

ために貴重な時間を割き、親身に諭してくれた師匠の心遣いに接して、己を恥じる思いが芽生えました。退路も断たず、一方的に思いを伝えるだけとは、あまりに失礼なことです。会社の説得は、親と違ってすんなりいきました。上司に「お話がありまして」と声をかけると会議室に連れて行かれ、その場で「やりたいことが見つかったので、会社を辞めさせていただきたいんです」と打ち明けました。そのときのやり取りはこんな感じですよ。

上司 「そうか。なにがやりたいんだ？」

私 「落語です」

上司 「……本気か？」

私 「はい……」

会社の上司や同僚には落語にハマっていることすらあまり話していなかったのですが、さぞかし驚いたと思います。もし、私のやりたいことが「企業のコンサルティング」などだったら、「うちの会社でも同じような仕事ができるぞ」などと止められていたかもしれないですね。しかし、「立川志の輔に弟子入りしたい」という退社理由では止めようがないですよ。

ね。「立川志の輔は我が社にもいるぞ」なんてことにはならないですから。上司はすぐさま本部長のところいき、話を通してきてくれました。そして、関西生まれの本部長がニコニコしながら私のところに来て、「小島、お前落語家になるんか!？」と大きな声で言いました。フロア中が騒然とするなか、私の退社がこのとき確定しました。前職の同僚の方々は、後の私の高座こうざを観にきてくれるなど、その後もとてもよくしていただいています。自分の我がままであつた3年で辞めたのにもかかわらずです。本当に感謝しています。

師匠に弟子入りしたのは2002年の10月5日です。府中ふちゅうで開かれた師匠の落語会に行き、楽屋口で「会社を辞めてきました。弟子入りさせてください」と直訴じきそしました。師匠は驚きながらも、「会社まで辞めてきたっていうんならなあ……まあ、しょうがねえか。そこら辺でウロウロしている」と言つて受け入れてくれました。

そこから私の落語家としての人生が始まったのです。

二章

落語仁

仁

舞

衣裳子

最初の修業は「自分をなくす」こと

私は師匠が三番目を取った弟子、つまり三番弟子として入門しました。師匠に入門を許可してもらったときに言われた「そこら辺でウロウロしている」という言葉は、師匠自身が入門時に談志師匠に言われた言葉でもありました。

落語家としてのスタートは、まさにその「ウロウロ」から始まります。「見習い」という立場で鞆持ちをしながら師匠の行く先々に付いていき、師匠の身の回りの世話を行うのです。その時点ではまだ名前をもらえず、「おい！」とか「見習い！」と呼ばれるのが普通です。そしてだいたい3か月後には落語家としての名前がもらえ、「前座」として見習い時代と同様に雑用をこなしながら、高座に出演する機会を得るようになります。前座になれば多少の小遣いはもらえますが、それだけで生活できるレベルではありません。貯金を切り崩したり、アルバイトをしたりして生活をしのいでいる前座が多いようです。前座の次の位である「二つ目^{ふため}」までは収入がほとんどありませんから、修業時代は食べるのがやっと。私の場合はアルバイトが出来なかつたので、貯金を切り崩しながら、夜になるとネズミが天井で運動会をするような、家賃3万円の安アパートで暮らしていました。

そんなパツとしない落語家の修業期間ですが、せっかく夢を叶えて立川志の輔の弟子に

なったからには、途中で放り出すわけにはいきません。「必ず一人前の落語家になる」。そう誓って、私は落語の世界の門を叩いたのです。

しかし、私の落語家としてのスタートは順風満帆とは程遠いものでした。通常、3か月ほどで名前をもらえることは先程お話ししました。私は10月に入門したのでその年の暮れには師匠から名前を付けてもらえると予想していました。兄弟子たちも「そろそろじゃないか?」「どんな名前だろうな」と言って期待を煽ってきます。しかし、待てども待てども師匠から名前がもらえません。「師匠はもしかしたら新年に名前を付けてくれるつもりなのか」と思ったりしたものの、年が明けてもその心配すらなし。結局、私が師匠から「志の春」という名前をもらったのはその年の12月、入門から1年3か月経った頃のことでした。それはそれは、人生で一番とも言える喜びがありました。

なぜ、そこまで名前をもらうのに時間が掛かったのか。おそらく、私の性格が原因だったのではないかと思っています。

前章でお話しした通り、私が大学に留学していたとき、アメリカは実力主義、個人主義が根付いている国だということを痛感しました。どれだけ論理的に話ができ、相手を説得し、ディベートで勝利できるかということを追求する社会だったので。大学にいたエ

リート層は、子どものときからそうしたトレーニングを徹底的に受けているので、私は「これはとても敵わないな……」とコンプレックスを抱いていました。

しかし、それでいて日本企業に就職した時には、アメリカ式を引きずっていました。「論理的に話せば相手を説得できるはずだ」「接待ゴルフは絶対にやらない」「会社人間になりたくない」などなど。社会人経験が浅い若造のくせに妙にアメリカナイズされ、日本的な古い伝統をどこかバカらしいものだと決めつけていた節があります。なんて非合理的な社会なんだろう、とはなから駄目だめだと決めつける傲慢さがありました。

たとえば私は、会社の飲み会が苦手でした。日本の飲み会には「お酌しやく」という文化がありますよね。上司のコップが空けば、部下はすぐさまお酒を注がなければいけません。それだけならいいのですが、部下である私にもどんどんお酒が注がれます。しかも、だいたいはビール。ほかのお酒を飲みたくても言い出せない雰囲気があります。上司が瓶を差し出してきたら、コップのなかにビールが残っていてもすぐに飲み干して注がれなければいけない。「なぜお酌を介さないと会話ができないんだらう。お酌をしたり、お酌を待ったりしながら飲みたくないものを飲み続けるより、みんな好きなものを好きなペースで飲めばいいのに。それに、お酌のタイミングを気にしているよりも、会話に集中したほうが実の

ある時間になるのではないだろうか」と常々不満に思っていました。

つまり、一口でいえば生意気。そして、「個人主義」「自分らしさ」に強いこだわりをもった、いけ好かない若者だったのです。

おそらく、この性格が師匠は気になっていたのでしよう。というのも、「落語」という芸の道に入るためには、一度、自分を完全になくさなければいけないからです。自分というものを白紙にしなければいけない。芸の道に入って「落語家」になるにあたって、「小島一哲」の存在は一旦、完全な邪魔者となります。つまり、小島一哲が立川志の春になる過程において、一度、小島一哲をぶっ潰しておかなければいけないのです。

なぜそんなことが必要なのかというと、小島一哲を追い出さないと私の中に「立川志の輔」が入ってくる場所が確保できないからです。後で詳しく話しますが、私は、落語家の修業は師匠と徹底的に同化することから始まると思っています。師匠から心構えや所作、芸などを吸収し、ようやく落語家としての自分が出来上がってくる。「立川志の輔」最後に残った自分らしさ＝立川志の春」になるというわけです。私は現在、二つ目なので、まだ完全に「立川志の春」を完成させたわけではありませんが、いずれにしてもまずは師匠が入ってくる場所を確保するために過去の自分は一度追い出さなければ、なにも始まりま

せん。

さらに付け加えるならば、「立川志の輔」のなかには、その師匠である「立川談志」が含まれています。こうした過程を経て、一門の伝統を後世に伝えていくのです。

しかし、私はなかなか「小島一哲」が追い出せずにはいました。師匠に注意されても「でも……」という言葉が、喉まで出かかります。アメリカでは自分の主張をはっきり言わないと、誰にも相手にされませんでした。そうした環境で教育を受け、多感な時期を過ごしてきたため、自分を叩きつぶすのに人より1年以上もかかってしまったのです。

今思うと、本当に師匠には迷惑をかけたなと反省します。普通なら3か月指導すれば叩きつぶせるところを、この出来の悪い三番目の弟子はちっとも自分を捨て切らない。当時は、「自分で自分だけずっと名前が付かないんだろう」なんて思ったりしたものでしたが、今はあれだけ凝り固まった頑固な弟子に向き合ってくれた師匠に対し、感謝の気持ちでいっぱいです。

ちなみに、師匠から名前をもらったのは大晦日おおみそかのことでした。師匠から呼び出され、「お前はなかなかよくならないな」と説教を受けていたと思ったら、「まあ、しかしこのまま説教していてもかわらない。とりあえず名前を付けてやるからしっかりしろ」と言われて、

「えっ？」と面食らっているうちにもらったのが、「立川志の春」という名前でした。

なぜ、志の春という名前なのかはいまだにわかりません。他の弟子たちは名前をもらうときに理由を聴いているようなのですが、なぜか私には教えてくれませんでした。まさか、こんなに綺麗な響きの名前をもらえるとは思いませんでした。私は夏生まれですし、春らしい爽やかさもありません。

前座名は後から変えることができるため、あえて前座らしい名前にする場合があります。私はどんくさい弟子だったので、兄弟子たちとも「名前は志の作じゃないか」「いやいや、志のべえだろう」などと予想していたものでした。それが、「志の春」という後々にも使えるような立派な名前をもらい、兄弟子たちもたいそうな驚きようでした。志の春という名前、正直むちゃくちゃ気に入っています。一生変えたくありません。

余談ですが、落語の世界に入り、自分をなくすことを覚えた私を一番喜んだのは妻でした。それまでは、よっぽど我が強かったのでしょうか。付き合うのに相当骨が折れていたと見えます。「師匠に弟子入りしてから、性格がましになった」と胸をなでおろしていました。私はどれだけ強情な男だったのでしょうか……。師匠だけではなく、妻にまでも迷惑を掛けていたとは情けない限りです。

師匠と徹底的に同化する

前座になってようやく修業は本格化します。とくに私の場合はなんとか名前をもらったものの、「小島一哲」がまだまだ抜け切れていない半端者です。師匠のもとで悪戦苦闘する日々は、その後も続いていました。

落語の世界では、「前座は気を遣うのが仕事だ」とよく言われます。「俺を快適にしろ」と、よく師匠にも言われました。

「俺を快適にできないで、お客さんを快適にできるはずがない」

これは、立川談志師匠の時代から貫き通されている弟子に対する姿勢です。

クルマを運転しているときに、「お前の運転はなっていない。車間距離の取り方、車線変更、ブレーキ、ウィンカーを出すタイミング。すべてにおいて心地よい間がある。その間はそのまま落語の上手さにもつながるんだ」と注意されたりもしました。「ならばとびきり運転のうまい弟子になろう!」と思っ、しばらくは落語よりも運転の上達に精を出していたりもしました。

先程も言ったとおり、アメリカの大学で個人主義の教育を受けた私は、気を遣うことが

大の苦手です。もっと言ってしまえば、そんなの必要ないとすら思っていました。他人には干渉しないかわりに、自分にも口出ししないしてほしいというのが基本的なスタンスです。ですから師匠に注意されたときも、つついっデイベートの癖で、「いえ、でも自分はこう思っただけです」ということが頭の片隅に浮かんでくる。それが顔に出てしまい、師匠を呆れさせてしまうことも度々ありました。

若い読者のなかには、この時の私と同じ考えを持っている人も多いのではないのでしょうか。「自分らしさ」こそが重要であり、誰かに合わせて生きるなんておかしい。相手が目上の師匠といえども、自分の意見があればしっかりと伝えるべきだ、と。私も当初はそう思っていました。しかし、修業を続けるうちに、こうした一見、非合理的にみえる師弟関係こそ、一人前になるために必要なことであると思いつくようになりました。

落語における師弟関係は最近流行のパワーハラスメントでもブラック企業でも、ただ単に師匠の前で調子良く振る舞う「よいしょ」でもありません。師弟関係の目的は、徹底的に気を遣い、相手と同化する経験を身を以て体感することにあると思っています。

「師匠から『名刺を持ってこい』と言われたとする。お前ならどうする？」

ある先輩からこんな質問をされたことがあります。

普通に考えれば、師匠の鞆から名刺入れを取り出し、師匠のもとに持っていくという行動が正解でしょう。その前提として、名刺を切らさないように気を遣い、減ってきたら事務所にある机の引き出しから補充することも忘れてはいけません。しかし、ここまでは普通の発想です。

この先輩は一步先に行っていました。

「俺だったら師匠から指示されたとき、師匠は本当にその方に名刺を渡したいかどうかを考える。一流の落語家ともなるといろんな人が近くに寄ってくるから、もしかしたら相手が怪しい人かもしれない。渡したいかどうかは、二人の話をきちんと聴いていればわかるものだ。『すみません、名刺を切らしています』と言ったら、『馬鹿野郎!』と怒鳴られるかもしれないけど、心の中では『よくやった』と思ってもらえる場合もあるんだよ」

この話を聴いた時に、誰かと同化することの本当の意味がわかったような気がします。端から見れば駄目な弟子が師匠から大目玉をくらっているようにしか見えなくても、裏では計り知れない師匠と弟子のコミュニケーションが交わされているのです。

たとえば師匠からマクドナルドのチーズバーガーを買ってくるように頼まれたとします。しかし、店舗に行ってみたら売り切れでした。この場合、師匠ならどうするでしょうか。

諦めて帰るのか、それとも違うハンバーガーを買うのか、買うならどの種類にするのか、それともモスバーガーに行つてモスチーズバーガーを頼むのか、もしかしたらマクドナルドで普通のハンバーガーを買つて、そこに市販のチーズを挟むかもしれない。さまざまパターンがあり、正解はないように思います。しかし、そこに師匠がいればいずれかの行動を選ぶはずで、それを徹底的に考え抜くということが、同化することです。できる努力をせずにただ「売り切れでした」と報告しては、何も考えていないことと同じなのです。

このように人の気持ちを考えるということは、実は並大抵のことではありません。人は相手の気持ちを考えているつもりでも、そこには自分が選択する基準が必ず含まれてしまうからです。彼女の誕生日にサプライズで財布を買つてあげるときのことを考えてみてください。欲しい財布を聴くわけにはいかないか、あなたは「この財布は彼女に似合いそうだ」と必死に考えてベストなプレゼントを購入しようとするでしょう。しかし、それは「自分が彼女に持つてもらいたい財布」であつて、「彼女がほしい財布」ではないかもしれません。実は普段の会話に小さなヒントがあつたりもするのですが、彼女の気持ちに徹底的に同化して、彼女の視点で財布を選択するということは、思っているよりも大変な

ことです。おそらく本気でそうしようと思うと、彼女の誕生日までには憔悴しようつすいしてしまいます。そういうことを修業中の落語家は毎日しているのです。師匠と彼女を同じにするのもどうかとは思いますが、少しは伝わったでしょうか？

師弟関係を強く結ぶという修業法は、師匠の近くにいることで技を盗めるというメリックがあります。しかし、習うことができる技術なんて、実はあまり多くはありません。

それ以上に大きいのは、師匠のことを常に考え続けていることによつて、師匠の存在そのものが自分の中に入ってしまうという感覚を経験することだと思っています。目の前の状況に対して、「師匠ならこう考えるだろうな」ということが自然と思ひ浮かぶ感覚です。まると師匠を自分の中に入れることで、技より根本的な生き方に共鳴していく。

どんな優秀な人間でも、1人の人間が持てる視野には限界があります。気付かないうちに思い込みに囚われ、思考を制限してしまうこともあるでしょう。だから自分とは違った存在を出来る限り自分の中に入れることができれば、視野が一気に広がり、思考が立体化します。

二つ目になったあとも、その大事さを身にしみて実感しています。私が高座で演じたネタを聴いて師匠がどう思うか。実際に聴いてもらわなくても、なんとなくわかるような気が

がするのです。「今日はそこそこウケたけど、師匠はよしとしないだろうな」。そういう指針が自分のなかになければ、落語家として成長していくことはできません。そして、指針を忘れずにいられるのは、見習いや前座時代に徹底的に師匠と同化したおかげなのです。

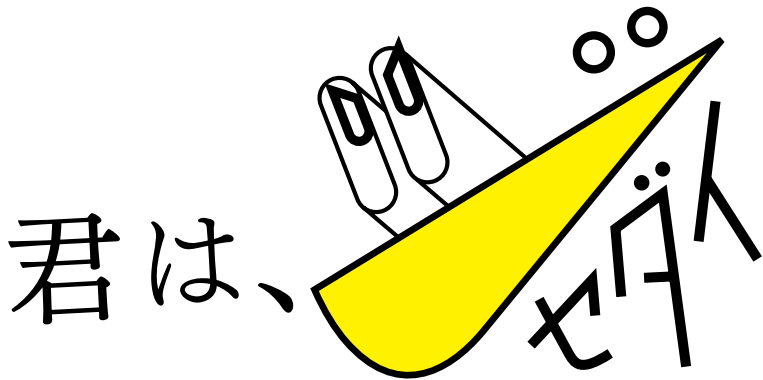
ビジネスでも同じことが言えるのではないのでしょうか。「尊敬する先輩が今の自分の仕事をどう評価するか」という指針がある人には、ぶれない強さがあるように感じます。

師弟関係、徒弟制度、てっち丁稚修業。どれも現代の感覚からしてみると古くさく、非合理的なイメージがあります。とくに物事を合理的に考えられる優秀な若者ほど、そう感じやすい印象があるのかもしれませんが。

しかし、私はそれはとてももったいないことであると感じています。

「俺は、そういう流儀ではない」と頭ごなしに否定せずに、この人はすごいという先輩を見つけたら、最低3年間はその人にとことん同化してみる――。

そうすることによって、はじめて見えてくる世界もあると思うのです。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ
イベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ニッポンのスタートアップ

3年後に再会することを約束して行う、未来アポ付きスタートアップインタビュー！

ジセダイジェネレーションズU-25

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!